

山梨中央ロータリークラブ

Rotary International District 2620
Yamanashi Chuo Rotary Club 2015-2016

事務所

〒409-3812

山梨県中央市乙黒 158-2 (山梨ビジネスパーク (株)カルク内)

TEL 055-273-5344 URL <http://yamachuo-rc.net/>
FAX 055-273-8010 E-mail rotary@yamachuo-rc.net



世界への
プレゼントになろう

Weekly Report

会長 樋貝 浩久

副会長 石原 満彦

幹事 田中 雅承

副幹事 小池 章治

会計 田中 雅貴

会報 石原 満彦

2015~2016 RI 会長
K.R. "ラビ"ラビンドラン

【例会日】
毎週金曜日 12:30 ~ 13:30

第 2620 地区 ガバナー
野口 英一

【例会場】
(株)カルク (055-273-5344)

2015 年 8 月 28 日 第 1689 回例会

本日のプログラム

卓話 米山奨学生 駱 予倩さん

会長挨拶

「第 17 回 食べもの異文化交流会」

会長 樋貝 浩久

本日は山梨大学の留学生を中心に開催される「第 17 回 食べもの異文化交流会」にお招き頂き、有り難うございます。

さて、食べもの異文化交流会も 1998 年から始まり、関係各位また留学生の皆様の努力で、今回 17 回を迎えた事を喜びに感じます。

当クラブと皆様とは、国際ロータリークラブの「公益財団法人 米山記念奨学会」を通じて、外国から日本の大学に留学している学生に奨学金を援助し、その地域のロータリークラブ会員がカウンセラーとなって奨学生の生活も含めて、支援いたしています。

今年度は、本大学大学院 医学部に所属している、帝京大学 医療技術学部 臨床検査学科でハンセン病の研究をしている、「駱 予倩(ろ よちえ)」さんに奨学金を提供し、応援しています。

毎年、参加者みなさまの手作りの、美味しい珍しい食べものを頂き、言葉は通じなくても、食べものを通じて、留学生の皆さんは日本文化

を知り、また地域の皆様は世界の文化を知る、非常に良い事だと思います。

この「食べもの異文化交流会」が、第 20 回、30 回と続く事を祈念致します。

最後に、雨で足場も悪いですが、美味しい物を食べて、頑張りましょう。



交流会でのセレモニーで樋貝会長挨拶



「昔ながらのころてん」用意万端で一す。

幹事報告

幹事 田中 雅承

1. 先週の「第24回峡中ジュニアサッカーフェスティバル」開催及び早朝例会、ご苦労様でした。
本日の夜間例会は「第17回食べもの異文化交流会」に参加の為、例会後「昔ながらのところでん」を出店しますので、ご協力をお願い致します。
2. 次回は8月の「最終例会」になりますが、米山奨学生の駱 予倩さんが奨学金の授与に参りますので、宜しく願い致します。
3. 8月23日(日)に「グランシップ静岡」にて、午後1時半より「地区ロータリー財団セミナー」が行われます事をお知らせ致します。
4. 第2620地区野口英一ガバナー事務所より「地区大会早割登録のご案内」が届いておりますので、お知らせ致します。登録料を8月31日迄に申込みを済ませた場合は、千円引きで下記の通りに成ります。
※登録料
14,000円 が 13,000円 と成ります。
5. 例会変更のお知らせ
なし

前回の例会記録

第1688回 出席報告

会員数	免除	出席者	欠席者	出席率	メイクアップ	前回の修正出席率
11名	0名	8名	2名	72%	3名	100%

届出欠席者 田中 雅貴君 石原 満彦君

届出失念者 なし

出席免除者 なし

メイクアップ 原田 哲君 石原 満彦君
田中 雅貴君

ビジター 第17回食べもの異文化交流会
参加

備考 なし

ニコニコ BOX

• なし

☆山梨中央ロータリークラブ卓話

Charity, a new fashion (3) ☆

米山記念奨学生 駱 予倩さん

このように、世界的には、マラソン大会の開催は走ることを「楽しむ」だけではなく、走ることを通じて「社会に貢献する」という文化的な側面も大きいのです。

※2015大会の寄付実績※

チャリティランナー： 2,930人

寄付金総額： 3億391万7,339円 (終)

<終戦から70年>

「人はみな平等」(1)

井川 實 先生

いまから六十六年前の昭和二十年、太平洋戦争が終わった年の秋、七歳だった私は、疎開先の瀬戸内海の小島から兵庫県の芦屋市にある母の実家へ引き揚げてきました。父が原爆被爆後の広島へ救助活動に行き、疎開先で命を落とし、母は私を含めて四人の子どもを連れて引き揚げる船賃に全財産をはたいたために、一家は食うや食わずの有り様でした。

◆ がまんの限界を超える大事件 ◆

芦屋へ着いた翌日、私は祖母に連れられて、地元の小学校へ行って二年に編入しました。しかし、粗末な服で靴も無くてゴム草履姿で、真っ黒に日焼けした顔で四国の方言しか話せなかった私は、全校生徒の好奇心を刺激したのか、激しいいじめの対象になってしまったのでした。毎日毎日、私はたくさんの子どもに取り囲まれて、「ばいきん」「さる」「死ね」などという言葉に浴びせられ、小突かれたり蹴られたり、砂や石を投げつけられたりもしました。

しかし、私はじっと耐えていました。母に言うと、母が悲しむと思ったからです。母は四人の子を食べさせるために、一番電車で神戸へ行ってケーキを仕入れ、それを大阪へ運んで売る、いわゆる「担ぎ屋」をはじめていました。

(つづく)

次回のプログラム 9月4日(金)

会員卓話 林 美喜枝 会員